

内田百閒

ノラヤ



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

あらいふ

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 竹内 均
外山滋比古 林健太郎 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫

ノ

ラ

ヤ

定価はカバーに表示してあります

1983年 1月17日	初版印刷	(乱丁・落丁本はお取りかえします) ので本社に直接お申し出ください)
1983年 1月25日	初版発行	
著 者	うち だ ちや けん 内 田 百 間	
発行人	あ け 好 夫 赤 尾 好 夫	
編集人	ちや ぎや けい 中 山 行 雄	
印刷所	新興印刷製本株式会社／合資会社 中村印刷所	
製本所	有限会社 穴口製本所	

発行所 株式会社 旺 文 社 電話 (編集)03-266-6372
(販売)03-266-6415
162 東京都新宿区横寺町

212054 ISBN 4-01-061362-9

©内田こい 1983

Printed in Japan (許可なしに転載、複製することを禁じます)

旺文社文庫

ノ ラ や

内田百閒著

目次

ノラや

ノラやノラや

ノラに降る村しぐれ

ノラ来簡集前書

ノラ来簡集目次

ノラ来簡集

朝雨

門の夕闇

田楽の涙

草平さんの幽霊

一本七勺

列車食堂の為に辯ず

放送初舞台

七 五 六 二 三 三 二 一 一 一 一 一 一 一 一

鯉の子

一九五

第七回摩阿陀會

一九九

御慶六年

二〇三

八代紀行

二〇五

千丁の柳

二一八

附 録

漾虛集を読む

二四三

「老猫物語」に就いて

二四七

老猫物語

二五〇

「ノラヤ」雑記

平山三郎

二六一

〔編集部註記〕 かなづかいは原文のままとした。漢字は正字体を新字体・略字体にあらためた。ただし、人名・地名をはじめ、漢字の一部を正字体とした。

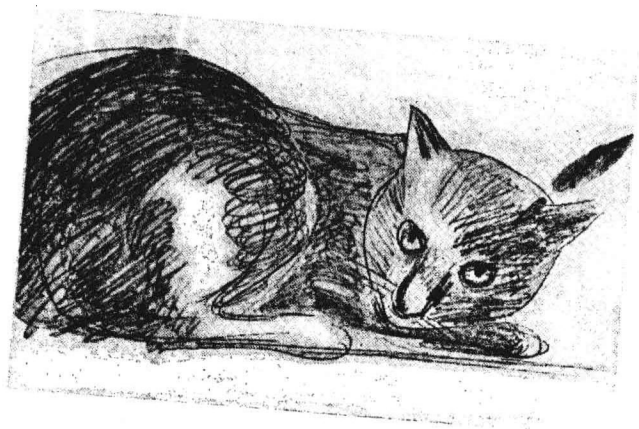
第 一 章 概 論

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

大九石

たにふたふ

ノ
ヲ
ヤ



夏目漱石筆 鉛筆画 明治末年頃ノ寫生

ノラや

一

猫のノラがお勝手の廊下の板敷と茶の間の境目さかひめに来て坐つてゐる。

外は夜更けのしぐれが大雨になり、トタン屋根だから軒を叩く雨の音が騒々しい。

お膳の上は食べ残したお皿がまだその儘に散らかり、座の廻りはお酒や麦酒の罎で、うつかり起てば躓きさうである。

しかしもう箸をおいたので、後ろの柱に靠れて一服してゐる。

その煙の尾を見てノラは坐りなほした。つまり両手にあたる前脚を突いた位置を変へたのである。

ノラは決してお膳には来ない。そのお行儀を心得てゐる。

猫は煙を気にする様である。消えて行く煙の行方ゆくへをノラは一心に見つめてゐる。彼がもつと子供

の時は、家内に抱かれてゐて私の吹かす煙草の煙にちよつかいを出し、両手を伸ばして煙をつかまへようとした。しかし今はもう一匹前の若猫だからそんな幼稚な真似はしない。ちつと見つめて、消えるまで見届ける。

「こら、ノラ、猫の癖して何を思索するか」

「ニャア」と返事をしてこつちを向いた。ノラはこの頃返事をする。尤も、どの猫でも返事をするのかも知れない。私は今まで、子供の時家に猫がゐた事は覚えてゐるが、自分で猫を飼つて見ようと考へた事もなく、猫には何の興味もなかつた。だから猫の習性なぞ何も知らない。ノラと呼ばば返事すると云つても、外の猫にノラと声を掛ければ矢張り返事をするのかも知れないし、ノラに向かつて人間の名前を呼び掛けても同じくニャアと云ふのかも知れない。さう云ふ実験をやつて見た事がないので、私にはどうなのだか解らない。

ノラはその間境に暫らく坐つてゐた後、どう云ふきつかけか解らないが、腰を上げて伸びをして、それから人の顔を見ながらローぱいの大きな欠伸をして向うへ行つてしまつた。多分風呂場へ這入つて、湯槽の蓋の上にもいつもノラの為に敷いてある座布団に上がつて寝たのだらう。

この稿は「彼ハ猫デアル」（『いささ村竹』収録）の続きである。一昨年の初秋、今は取りこはした低い物置小屋の屋根から降りて来た野良猫の子が、私の家で育つて大きくなつたので、私も家内も特に猫が好きだから飼つたと云ふわけではない。自然に私の家の猫になつたので、その経緯は右の「彼ハ猫デアル」に詳しい。その稿にもことわつてある通り、ノラと云ふ名前はイブセンの「人形の家」の「ノラ」から取つたのではない。それなら女であるが、うちのノラは雄で野良猫の

子だからノラと云ふ。だからノラと云ふその名は世界文学史に丸で関係はない。

うちのノラが降臨した高千穂ノ峰は物置小屋である。そのもとの低い物置を去年の秋に取りこはして、後に新しい物置が建つた。今度のは大分立派で、しつかりしてゐて、屋根も高い。屋根はペンキ塗りのトタンである。ノラは早速新物置の屋根に上がり、塗り立てのペンキの上を歩いて帰つて来て家内に抱かさつたから、家内の上つ張りはペンキだらけになつた。ノラの足の裏をアルコールやペンジンで拭いたり、上つ張りの始末をしたり、大騒ぎをしてゐた。

私の家には小鳥がある。目白二羽と赤ひげで、昼間は飼桶から出して座敷に置く。猫に小鳥は目の毒に違ひない。ノラが子供の時は、廊下から座敷の小鳥籠の方をちつと見据ゑて、腰を揉む様な恰好をした事がある。飛び掛からうとしたのである。叱つて頭をたたいて止めさせたが、さう云ふ事が習慣になつて、ノラは決して疊敷きの上には這入つて来なかつた。うつかり這入つて来ようとすると、私が睨めば止めて、そこへ坐り込んでしまふ。猫を睨むにも気合ひがある。学校教師の時、学生を睨んだ目つきでは猫には通用しない。

昔、四谷の大横町の小鳥屋に猫がゐて、目白や頬白の籠を置いた間で昼寝をしてゐたのを見た事がある。猫でもしつけをして馴らせば、小鳥に掛からぬ様になる実例を私は見て知つてゐる。

ノラが大分大きくなつて、私と家内と二人きりの無人の家にすっかり溶け込み、小さな家族の一員になつた様である。顔つきや、特に目もとが可愛く、又利口な猫で人の云ふ事をよく聞き分けた。いつも家内の傍にゐるので、家内は可愛がつてしよつちゆう抱いてゐた。私がこつちにゐる時、お勝手に何か云つてゐる様だから、声を掛けて、だれか来てゐるのかと聞くと、ノラと話しを

してゐるところだと云ふ。

「いい子だ、いい子だ、ノラちゃんは」

少し節をつけてそんな事を云ひながら、お勝手から廊下の方を歩き廻り、間境の襖を開けて、「はい、今日は」と云ひながら猫の顔を私の方へ向ける。ノラは抱かさつた儘、家内の前掛けの上で、先の少し曲がつた尻尾を揉む様になり、尻尾全体で前掛けをぼんぼん叩いたりする。

生まれてまだ一年経たない去年の夏、庭へ出るとよそから来た猫と張り合つて、喧嘩する様な声をし出した。しかし大体どの猫にもかなはない様で、さう云ふ声が聞こえると、いつも家内がやり掛けた事を投げ出して加勢に駆けつけた。ノラは私の家の庭から外へ出た事がないらしく、いつもそこいらの門の脇か屏の上で睨み合つてゐるのだから、加勢も役に立つわけである。

私の家には門が二つある。往来に面した門から両隣りの間の細長い路地を這入つた所にもう一つ内門がある。その門と門との間をつなぐ混凝土の通路の半分迄もノラは出て行かない。往来の門まで出て、外を見た事は一度もないだらう。たまに家内が郵便を入れに行つたり近所の用達しに出たりすると、ノラは内門の傍までついて行つて、そこから先へは行かない。帰つて来ると、そこにちやんと坐つて待つてゐたと云ふので、家内は抱き上げて煩ずりしながらお勝手に這入つて来る。

庭から外へ出なくても、庭の屏を隔てた向うの靴屋の藤猫が子供の時からノラと仲好しでいつも遊びに来るから、友達には不自由しなかつたのだらう。その藤猫はノラと前後した頃に生まれた雄で、雄同士でも気が合ふと云ふ相手があるのかも知れない。いつも二匹揃つて、鼻を突き合はせる様にして日向ぼっこしたり、庭石の上のいつまでも竝んでしゃがんでゐたりする。ノラのお友達だ

からと云ふので、家内がお皿に牛乳をついで持つて行つてやると、靴屋の藤猫がうまさうに舐めるのを、ノラは傍から眺めてゐて、妨げもしなければ、自分が飲まうともしない。

しかし靴屋の藤猫でない外の猫が庭へ来るとノラは怒るらしい。追つ拂はうとするのだらうと思ふけれど、その実力はないので仰山な声をするだけで結局は逃げて帰る。

よそから来る猫の中に、一匹すごく強いのがゐて、玉猫でこはい顔をしてゐる。ノラはその猫には丸で歯が立たないらしい。一声二声張り合つてゐる内に、いつでもギャツと云はされて逃げて来る。

夏の暑い日の昼間、ノラは茶の間まがの廊下すまの隅で、壁にもたれる様にして昼寝をしてゐた。突然猫の悲鳴が聞こえて、どたばた大変な物音がするから、驚いて茶の間から私が飛び出して行くと、いつの間にかその玉猫の悪い奴が、暑いので開け放しはなにしてあつたお勝手の戸口から家の中へ這入り込み、いい心持ちに昼寝をしてゐるノラの多分腰のあたりへ噛みついたのだらう。ギャツと鳴いて跳ね起きたノラを追つ掛け、廊下の突き当りの洗面所の下で団子の様になつて揉み合つた末、ノラが戸が開いてゐた風呂場へ逃げ込むのをまだ追つて二匹共外へ出てしまつた。

中の間まにゐた家内が飛んで来て、ノラに加勢に馳けつけたが、もうそこいらにゐなかつた。廊下や風呂場の簀すのこ子に、ノラが引つ掛けたと思はれる苦しまぎれの刹那しゅん小便の痕あとが點點と散らかつてゐる。無心に寝てゐるノラをいちめた悪い奴に非常に腹を立てたが、家内は一層憤慨して、いつだつてノラをいちめてゐる挙句あげにこんな事までした。もう勘辨しない。これからは見つけ次第、引つぱたいて、突つついて、追つ拂つてやると云つた。

ノラは悪い奴の追跡から逃げのがれて、ちぎに帰つて来た。家内はすぐに抱き上げ、頬ずりしていたはりながら、怪我はしなかつたかと方方調べてゐる。抱いたノラの胸がこんなにどきどきしてゐると云つて可哀想がつた。

家内は悪い奴の声を聞き覚えてゐる。ノラがうちにゐる時でも悪い奴がその猫と喧嘩する声があると、出て行つて追つ拂ふ。ノラが外に出てゐる時悪い奴の声がしたら、何をしかけてゐても投げ出して、長い物干竿を持ち出し、その現場へ行つて悪い奴を突つつく。ノラはうちの庭から外へ行かないので、大概家内の加勢が效を奏する。いつもさうするので、しまひには家内が出て行つただけで、悪い奴はその姿を見て逃げてしまふ。ノラは自分が強くなつたのかと思つてゐたかも知れない。

ノラは子供の時おなかをこはして、洗面所の前で不始末をした事がある。自分の垂れたべたべたした糞を足拭きの切れの中に包み込んで、と云ふのは砂の上にした時の要領で後脚で切れを蹴つたから包んだ様な事になつたのだらうと思ふけれど、大いに信用を害して後始末をした家内から叱られた。

それから後はふんし箱の砂の中へする事をよく覚え、二度としくじつた事はなかつたが、あんまり覚え過ぎて、しなくてもいい時にもする様になつた。外から帰つて来ると、急いでお勝手の狭い土間に置いてあるふんし箱の砂の中へ小便する。うちへ帰つてからしなくても、外にいくらもその場所はあるのだから、済まして帰ればいいのに、と家内がこぼす。さつき砂を代へたばかりなのにまた新らしくしなければならぬ。本当に事の解らない猫だと云ふ。

さうして砂だらけの足で上がつて来たお勝手の板場や廊下を帚で掃いてゐる。

外へ出て行く時も同じ事で、砂箱にしやがんでゐると思ふと小便をして、ちやんと砂をかけて、さうした上で庭へ出て行く。庭へ行くなら庭でしたらよささうなものを、と家内がぶつぶつ云ひながら又砂を代へる。

食へ物は、初めの内は私共の食べ残しを何でも食べてゐたが、一昨年の晩秋、まだ極く子供の時に風を引いて元気がなくなり、何も食べなくなつたので私共が心配した。大磯の吉田さんの所へよばれて行つた時の事なので、その前後をよく覚えてゐる。家内が可哀想がつて抱きづめにした。バタと玉子とコンビーフを混ぜて捏ね合はせた物を造つて食べさしたら、なんにも食べなかつたのにそれはよく食べた。それから元氣になつた。

ノラはこの世にうまい物があると云ふ事をその時初めて知つたかも知れない。

猫にやる煮魚は薄味の方がいいと云ふ事を聞いて、別に薄味に煮てやる様にしたが、煮たのより生の方がいいと又教はつたので、生の儘やる様にしたら大変よろこんで食べる。猫を飼つた経験がないので、さう云ふ事はよく解らないが、いわしは好きでないらしい。小あちの筒切りばかり食ふ。ノラは與へた食べ物をお皿の外へ銜へ出す事をしない。辺りをちつともよごさずに、お皿の中だけで綺麗にたべる。

和蘭チーズの古いのがあつたから、細かく削つて御飯に混ぜてやつたら大変氣にいつて、いつ迄もそれを続けた。丸い赤玉のチーズが無くなつてしまつたので、新らしいのを買つて、又削つて食べさした。

その内に御飯はあまり食べたがらなくなつた様だから止めて、専ら生の小あちの筒切りと牛乳だけにした。小あちは大概魚屋にあるけれど、うちへ来る魚屋に小あちがない日もある。さう云ふ時は近くの市場のいつも薬を取つてゐる薬局に頼んで、同じ市場の中の魚屋から買つて来て貰つたり、近所のアパートから区役所へ通つてゐる末亡人に帰りの通り路の魚屋から買つて来て貰つたりして間に合はせる。

生の小あちの筒切りのお皿の横に牛乳の壺が置いてある。彼は大概あちの方を先に食べて、それから後口に牛乳を飲む。一合十五円の普通の牛乳では氣に入らない。どうかすると横を向いてしまふ。二十一円のグワンジイ牛乳ならいつもよこんで飲む。生意氣な猫だと云ひながら、つつい猫の御機嫌を取る。

その他、カステラや牛乳の残りでこしらへたプリンは食べる。ノラが一番好きなのは、いつも取る鮎屋すしやの握りの玉子焼であつて、屋根の様にかぶせてある半べらを家内が残しておいて、後で與へる。ノラは私共が何か食べてゐても決してその手許をねだる事はしない。後で與へるまで待つてゐる。

こちらが済んで家内がお勝手に出て、流しの前の小さな腰掛に腰を掛け、さあお出でと云ふとよろこんでその膝に両手を掛け、背伸びする様な恰好で長い尻尾を突つ立てながら、家内の手から玉子焼を千切つて貰つてうれしさうに食べる。鮎屋の玉子焼は普通家で作るのと違ひ、河岸から仕入れて来る魚のエキスの様な物の汁が這入つてゐるのださうであつて、猫の口にはうまいに違ひない。そのよろこぶ様子が見たいので家内はいつでもノラの為に残して置く。

しかし鮎屋が出前の桶を届けて来て、ノラが坐つてゐるお勝手の板場に置いて、ノラはそれにして手を出した事はない。お勝手の棚にも上がらない。魚屋が届けて来た切り身が棚にあつても、ノラがそれを持つて行つたと云ふ事は一度もない。

つまり食足りて礼節を知つたのだらう。落ちつき拂つて、動作がゆつくりしてゐて、萬事どうでもよささうな顔をしてゐる。考へ込むと云ふ事のある筈はないが、一所にちつと坐り、何だか見つめて、学生が語学の単語の暗記をしてゐる様な顔をしてゐる事もある。

家内が手洗ひに立つと必ずついて行つて、戸口の外の廊下に坐つて待つ。変に食ひ違つた森蘭丸だと思ふ。出て来れば、さもさも待つてゐたと云ふ風に大袈裟な伸びをして、欠伸をして、後を歩いて歩く。

家が小人数だから、食べ物^{モノ}の遣り繰りは利かない。猫が食べなければその始末は私共がしなければならぬ。小あちを買ひ過ぎて残つたとなると、ノラにさう澤山押しつけても食べるものではないから、結局私共が酢^酢の物にしたり天婦羅^{てんぷら}にしたりして頂戴する事になる。鮎屋の出前持ちがノラと昵懇^{昵懇}なので、これをノラちゃんに上げて下さいと云つて、身つきのいいあらを持つて来てくれた。家内が煮て與へたらちつとも食はない。しかし大変いいあらなので勿体ないから、もう一度人間の口に合ふ様な味に煮なほして、私と家内でしやぶつた。

私は去年の内に二度、春と秋に九州へ行つた。そのどつちの時であつたか、又行きか帰りかもはつきりしないが、多分帰り途だつたと思ふ、絲崎か尾ノ道かの辺りで寝台でよく眠れなくてうとうととしてゐた。夢ではなく、ぼんやりした頭でそんな事を考へたうつつだつたかも知れない。通過驛